

教育

を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

1 1992年にピークを迎えた18歳人口は、その後少子化に向かう。現在は少子化後の横ばい状態が続いているが、本書は一見小康状態に見える入試戦線を取り巻く、大学および高校そして受験生と保護者の変化の様子を鋭く捉えている。

ま ず少子高齢化に対応する大学の様子だ。なんと高齢者を狙い撃ちした学部が登場する。

「関 西大学文学部では2008年から『カレッジリンク型シニア住宅』に文学部のプログラムを提供しています。カレッジリンク型シニア住宅というのは、大学（カレッジ）と高齢者向け住宅を連携（リンク）させて運営する取り組みで、アメリカなどでは先行して事業が進められています」というのだ。

ま た立教大学でも池袋のキャンパスで団塊世代のシニアを主な対象にして「立教セカンドステージ大学」を立ち上げているという。

眼 のつけどころとしては面白いのではないかと。高齢者が知的世界に回帰するというのは、国としても歓迎すべきことではないか。それよりも、これらの事例は誰でも思いつくことかもしれないが、やってしまうところ

に昨今の大学の実行力・バイタリティを感じるではないか。

と ころで、2010年度の私立大学の入学者がどんな選抜方法で入学しているかを調査すると、一般入試（いわゆるペーパーテスト）が48.1%、推薦が40.9%、AOが10.5%となっており、推薦入試とAO入試で51.4%と過半数を占めた。この推薦・AO入試拡大の傾向は今後も続くであろうが、本書ではこの傾向に対する高校の受け止め方にも言及する。

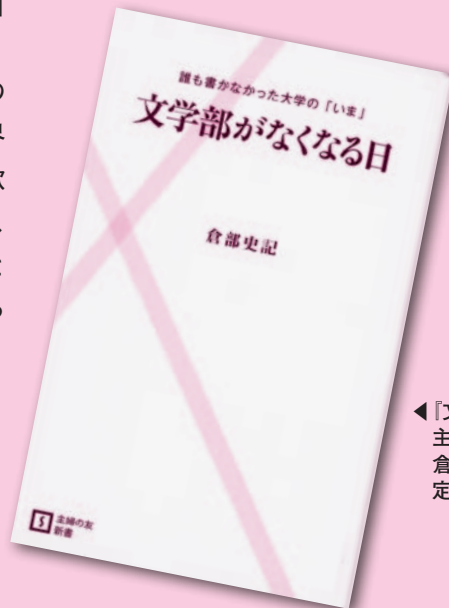
「学 校によって事情はまったく異なるので一般化はできないのですが、こういった進学クラスの生徒に、AO入試や推薦入試（公募制、指定校制など）への出願を禁じる高校というのが、実は少なからず存在しているのです」という。

そ の理由を本書は次のように説明する。

一 つは高校の合格実績を伸ばすにはあまり役に立たない。前記の事例のように優秀な生徒にはたくさん受験して、たくさんの合格実績を残してほしい。第二に推薦やAO入試は指導が面倒くさい、または指導できない。「つまり、志望理由書の書き方やプレゼンの指導には手間がかかるし、そもそも指導できる教員が少ない。そしてクラスの和を乱す。つまり早々と合格した生徒が、進学に向けてがんばっているクラス全体の雰囲気乱す」とこの本の筆者は述べていますが、先生方いかがでしょう。

こ のほかにも保護者パワーの項では、日本だけではなく米国にも過保護な親がいて「ヘリコプター・ペアレンツ」と呼ばれているなど興味深い話題が満載されている。

た だしタイトルの『文学部がなくなる日』はセンセーショナルだが、文学部という名称が「国際文化学部」「社会福祉学部」「総合人間学部」などに変わっていくという意味である。



◀『文学部がなくなる日』
主婦の友新書
倉部史記 著
定価 本体781円+税